

本報の著者 〇五、假面の世

今の世は、情實と形式とが狂奔亂舞せる浮世なり。假面を楯として働く醜類の戰場なり其の間一の眞
正華麗でよき例を認むべからず。商業家は着實てふ假面を被りて、掛引と騙詐とを専門とし。實業て
ふ假面を被るものは、投機を事とす。政治屋は權變詐術を弄きて能事終れりとす。以て終に彼等は、何
事と論ぜず何時を問はず、正義の礎上に築かれざる事業の、遂に不名譽の紀念碑たるを知らず。予は
今の世を名けて假面の世と云ふ。(廿一年五月)

文 苑

和文

戒

稼堂 陳人

世間の人のおのがほををしらすあるは、人を凌ぎて恣きまゝに之あるは形を
世間のみせあらぬもの、侮をうけあるはひまを偷みてあらくふるまふ、我常に
へいむれをばらむ、これらはすべて禍に及ぶものなり、一日、人のきて、鹿、驢、鼠の物語
し、おむる御事のこれに似たれば、記きて三戒とす、(柳文を譯す)
臨塗の人獵して鹿兒を獲たりければ家に飼はんとて、ゐて歸りけるに、家の犬、鹿を
いどほよびはうきて、その人傷もやつけむ、とおもひわづらひて、日々抱きで馴れ
せむる鹿、鹿は鹿も年をへて、ふとらければ、今はその身をも忘れて、これよき友と

朝夕犬に戯て、頭にふれ、尾をくはへなどすれども、犬あるじを恐れて、えかます、相親むやうにはあれど、時ありては、舌をいたすこともありけり、さて魔三とせばかりへて、ゆくりなく、門を出で、よその犬の多く道ゆくを見て、吾家の犬のやうにれもひなし、やをら戯んとしければ、このをこのものど走りきて、時の間に咬みころえ、道のうへにけちらしてぞいにける、魔は死ぬるまで、さとりざりしとなむ。

黔州は驢ウサギのすまさりける所なるが、一年物好むものゝありて、舟にのせて、されど用ふる所もなく、山のふもとに放ちおきけり、虎いできて、そのむくつけなるを見て、大に恐れ、遙の木蔭にかくれて、見おたりけり、まばえありて、おそるゝいで近つきけるに、一聲いばえければ、虎大にれどろき、あわてゝ遁去る、おのれをかまんずらんとれもひしなるべし、やがて、またたちかへり、見をれども、ことやうなるかども、なかりければ、いつまか、その聲にもなれて、つゆれそれず、前に近づき、後にいでつれども、蹴りもせざれば、いよく、馴れて、尾をひき、脚にふれなどするを、いたく憤りて、蹄をあげければ、虎さばかりと、やれもひけん、れどりきたり、一聲大にさけびて、ただちにその咽にかみつき、その肉をば、くひ盡えて、ど去にける、形のふとりたるは、うどくの人に似たり、聲の大なるは、ひとかきあるに似たり、もまその手をだに、出たさざりせば、虎いかに猛なりども、そら恐えくして、かゝらざらましを、あらはしたるこそかなしけれ、

永州の某、いたく物忌して、たのれは、子の歳にうまれたればとて、鼠を殺すことを忌

み、猫もたかす、はえたものにも、いひ仰せて、逐はせず、倉くりとなく、鼠の遣はるるを、かきければ、かたみに相かたらひて、皆なにかしの家につきて、日々あれまはれども、どがめす、かゝれば、その家の戸、さうじより、はこわんにいたるまで、鼠のは、かけざるものもなく、そのくひ物は、なべて、そのくひのこまなりけり、終には、日のうちにいで、人につきありき、夜はいもねず、物をぬすみて、ちうくあらかひさわけども、あるは少もいとはず、そのうちに、なにかしよそにうつりて、はかの人來りすむ、鼠さりどもしらず、もとのことく、ふるまひければ、鼠は陰物なり、この家には、何とてかくは甚まき、退治せでやはあるべき、とて五足の猫、かりきて、門をどち、口をふさぎ、瓦をあばき、穴に水をくぎ、まもべどもして、よもに網はりて、どらへつゝ殺まければ、忽に鼠の塚をなし、一月あまりもそのくさみやまさりしといふ、いつまでもあくまでくひて禍なし、とおもへるにか、いとあさまし、

出立の記

そまを

去歲の冬、亡くなりたまひ、玄祖母上、くしくも此世にましく、て例のやさまきみ聲きて、吾を呼びたまふと覺て、夢さむれば、母上のわか枕もどに立ちて、しきりによひさまえたまふなりけり、はや四時なれば、起き出て、支度して、と云ひすて、忙しげに茶の間の方へ行き、たまひけるに、時計を見れば、げに四時を五分すぎたり、床の中の心地云はんかたなければども、今日は十二里の道程なれば、心急かれて、つとめて起